

第 37 回 日本受精着床学会 学術講演会

P-53

東京、2019.8.1-2

社会的卵子凍結説明会を実施して見えた現状と課題

達富友美 佐野郁美 杉本朱実 西原卓志 井上朋子 森本義晴

医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

「社会的適応による未受精卵子および卵巣組織の凍結・保存に関するガイドライン」（日本生殖医学会、2013）が示され、社会的卵子凍結保存治療は、将来子どもを望む女性に関心が高まっている。しかし、卵子凍結保存が広く浸透することによる晩婚・晩産化の助長が懸念されている。今回、卵子凍結保存に関心を寄せる女性の目的を明らかにするため、説明会参加者を対象にアンケートを実施した。

【方法】

2015 年 11 月から 2019 年 1 月に当院で開催した卵子凍結説明会に参加した女性 112 名を対象とし、説明会後にアンケート用紙を配布、回答の集計を行った。

【結果】

アンケート回収数は 110 部で、参加者の平均年齢は 38.3 歳であった。卵子凍結に興味を持った理由は「将来の保険」が 63 名、「パートナー不在」が 54 名、「仕事・学業に専念したい」が 7 名であった（複数回答）。説明会参加後、卵子凍結を「受けてみたいと思う」は 84 名、「思わない」は 4 名、「わからない」は 16 名であった。受けてみたい理由としては「将来子どもが欲しい」「選択肢がひろがる」、思わない・分からないとの理由としては「費用負担」「身体的リスク」が挙がっていた。説明会后 43 名が受診し、卵子凍結に至ったのは 31 名で平均年齢 39 歳であった。

【考察】

卵子凍結を希望する女性は、「将来の保険」「パートナー不在」等、今は叶わない妊娠への備

えと考える女性が多数を占めていたが、希望者年齢は一般的に妊孕性が低下し始めるとされる年齢を上回っていた。説明会参加から卵子凍結に至るまでの実際関わりのなかで、年齢、仕事との両立等の不安を感じている事がうかがえ、その中でも費用負担や身体的リスク等が卵子凍結を躊躇する原因にもなっていた。本検討より、年齢上昇に伴う妊孕力の低下についての教育、ならびに卵子凍結を選択しなくても適齢期で安心して妊娠・出産・育児にのぞめる社会づくりの必要性を感じた。